

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

La construcción tough en español (III-3)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福嶋, 教隆, FUKUSHIMA, Noritaka メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2087

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



イスパニア語の tough 構文について (下の3)³⁸

福嶋 教隆 (FUKUSHIMA Noritaka)

目次

1. 序論
2. 従来の研究
3. 調査
 3. 1. 文例収集 ----- 以上, 拙稿 (1986a) 「上」
 3. 2. 関連構文の文例
 3. 3. インフォーマント調査
4. 考察
 4. 1. 動作主句 (PARA MÍ) --- 以上, 拙稿 (1988a) 「中」
 4. 2. 主語 (ESTE LIBRO) ----- 以上, 拙稿 (1994) 「下の1」
 4. 3. つなぎ動詞 (ES)
 4. 4. 形容詞 (FÁCIL) ----- 以上, 拙稿 (1995) 「下の2」

 4. 5. 前置詞 (DE) ----- 以下, 本稿
 4. 6. 不定詞 (LEER)
 4. 7. 文末, 文全般 (φ)
5. 結論

4. 5. 前置詞 (DE)

この項の考察対象は, モデル文 *Para mí, este libro es fácil de leer.* における *de* のしめる位置である。資料にしている 150 の収集文例では, この位置には, すべての例で前置詞 *de* が用いられている。

³⁸ 本稿は, 拙稿 (1986a), (1988a), (1994), (1995) を受けるものである。その一部はイスパニア語版としても発表されている (拙稿 1985, 1988b)。また, 拙稿 (1986b) では, ロマンズ語全般の中でこの問題を論じている。

拙稿（1986b: 64-65）では、イスパニア語（スペイン語）の tough 構文では、古くからラテン語 *dē* に由来する前置詞 *de* が専ら用いられてきたことを示した。また、他のロマンス語の中には、ラテン語 *dē* 以外の起源を持つ前置詞が使用される場合があることを示した。即ち、ポルトガル語、ガリシア語、カタロニア語、ルーマニア語の tough 構文で使われるのは、ラテン語 *dē* 由来の前置詞 *de* だが、フランス語では *à*（< ラテン語 *ad*）、イタリア語では *a*（< ラテン語 *ad*）および *da*（ラテン語 *dē* + *ab*）が用いられるのである。

一方、拙稿（1988a: 71-72）では、「形容詞・副詞 + *para* + 不定詞」という語連鎖が、tough 構文と意味的、形式的に類似しているところから、これを「疑似 tough 構文」と名づけ、12 の例を掲げた。³⁹ ここには前置詞 *de* ではなく、*para* が用いられている。この構文も tough 構文の一種とみなし、「イスパニア語の tough 構文には、前置詞 *de* および *para* が用いられる」と言うべきだろうか。

疑似 tough 構文は、*bien para vivir* (*Pseudo-2*), *demasiado complejo para abarcarlo* (*Pseudo-5*), *muy fea para retratarme* (*Pseudo-7*), *demasiado hermoso para romperlo* (*Pseudo-8*), *demasiado íntimo para hablar* (*Pseudo-10*), *aún pequeña para llevarla* (*Pseudo-11*) のような形をとる。順に「暮らしやすい」、「把握するには複雑すぎる」、「写真を撮られるにはみにくすぎる」、「壊すには美しすぎる」、「話すには微妙な問題でありすぎる」「連れて行くには幼すぎる」という意味で、表面的には、「難易」、「快・不快」などを表す tough 構文との共通性が認められる。

しかし疑似 tough 構文の大半の事例が示すのは、「ある行為の実行を阻止する属性」が存在することである。第 4. 4 項で述べたとおり、tough 構文の形容詞の基本的意味特徴は「利用者の側から見た属性」を表すことであるから、両者は表現動機が異なっていると考えなければならない。

第 2 に、疑似 tough 構文は *demasiado*, *aún* のような程度副詞の力を借りて上述の意味を成り立たせる例が多い。tough 構文では形容詞にこれらの副詞を冠した例はなく、また *muy* や *más* を冠する場合も、これらの語は必須要素とは言えない。

第 3 に、疑似 tough 構文では、形容詞・副詞の意味上の主語と同一指示の直接目的格代名詞が不定詞に後接する事例が多い。また、不定詞が自動詞

³⁹ 拙稿（1988a: 71）では『『形容詞 + *para* + 不定詞』という語連鎖』と述べたが、*Pseudo-1*, *Pseudo-2* のように副詞 *bien* の用例も対象にしているのも、正しくは上記のように言わねばならない。また、拙稿（1988a: 72）の *Pseudo-8* の 4 行目 *romperlo* は *romperlo* の誤記である。

である例も少なからずある。第 4. 6 項で見るように, tough 構文でもこれらの事例はどちらも皆無ではないが, 一般的とは言えない。本研究では, *Pseudo-11* を基にして, *Pequeño-I* (La niña es aún pequeña {a. de llevar / b. de llevarla / c. para llevar / d. para llevarla} a los pagos.) という文を作り, 31 人の母語話者にその許容度を尋ねた。a. は 11%, b. は 15%, c. は 13%, d. は 94% の許容度であった。⁴⁰ 即ち, この形式では *de* ではなく *para* が要求され, 直接目的格代名詞を付すことが好まれることが確認できたのである。

以上の点から, 疑似 tough 構文は, tough 構文の一種とみなすには問題がある。従って, イスパニア語の tough 構文がとる前置詞は *de* に限られると言っていいたいだろう。

4. 6. 不定詞 (LEER)

この項では, モデル文 *Para mí, este libro es fácil de leer.* の中の *leer* がしめる位置を扱う。資料の内訳は次のとおりである。

- (32) a. 他動詞 (145 例。うち他動詞として働く動詞句 3 例, 補助動詞を伴う他動詞 1 例)
 b. 受動態の他動詞 (2 例)
 c. 使役形式の動詞 (3 例。他動詞 1 例, 自動詞 2 例)
 d. 自動詞 (3 例)
 e. 再帰動詞 (7 例)

資料は 150 例だが, 1 つの tough 構文中に不定詞が等位形式や並列形式で複数個現れる事例が 8 つある (2 個が 6 例, 3 個が 2 例。例: *Imposible-125: imposible de esconder y sujetar*) ので, 不定詞の総数は 160 となる。

なお, 不定詞は全て肯定形である。本研究では, 念のために *Difícil-X* (*Juan es difícil de no enfadar.*) という否定形の不定詞を用いた文の許容度を調べたが, 2 人のインフォーマントは, どちらもこれを「不自然である」と判断した。⁴¹

⁴⁰ 「許容度」の算定法およびインフォーマント調査の方法と結果の詳細については拙稿 (1988b) に記した。

⁴¹ 拙稿 (1988b: 74) に記した。これは Bosque (1999: 249), 下田 (2006: 42) の見解と合致する。

4. 6. 1. 他動詞

用例の大半は他動詞である。これは、第 4. 2 項で、モデル文の *este libro* がしめる位置に現れる語句の大半が不定詞の意味上の直接目的語であることを示したことと合致する。

この中には *hacer, realizar, operar, preparar, resolver, encontrar, cumplir, usar, utilizar, manejar, conducir, lavar, limpiar, domesticar* のような「課題を達成するための行動」を表す動詞, *entender, comprender, interpretar, juzgar, deducir, creer, prever, imaginar, adivinar* のような「理解・認識」の動詞, *decir, contar, explicar, asegurar* のような「発話」の動詞などが含まれる。これらは概して意図的な行為である。*olvidar* のように、非意図的な意味を示し得る動詞も、*tough* 構文で用いられる場合は、「忘れようと努力する」意図的な行為を表す (*Difícil-23, Difícil-46*)。

duro de pelar (Duro-2), malo de pelar (Malo-1) においては、不定詞は「皮をむく」という原義を失い、形容詞句全体で「困難な」という、意図的な行為を踏まえた成句となっている。⁴²

(32a)の「他動詞として働く動詞句」とは、*llevar a la práctica (Difícil-50), tener en cuenta (Digno-4), llevar a efecto (Imposible-2)* を指す。また「補助動詞を伴う他動詞」とは、「開閉が容易なチャック」を表す *Fácil-25* の *abrir y volver a cerrar* の *volver a cerrar* の部分を指す。これらの動詞句も意図的な行為を表している。

しかしこのような複合的な動詞の使用が常に許されるとは限らない。本研究では、以下のような補助動詞を伴う動詞句を用いた *tough* 構文の許容度を調べた。*Difícil-VI (Estos mapas serán difíciles de empezar a hacer.)*, *Difícil-VII (Tales cosas son difíciles de insistir en hacer.)*, *(Im)posible-IV (Estas galletas son casi imposibles de dejar de comer.)*。12 人の母語話者のこれらの文に関する許容度は順に 29%, 38%, 54% という低さであった。⁴³ 先述の *Fácil-25* の *volver a cerrar* が可能なのは、*abrir* と対になって「開閉」という意味の一部を担っていることが関与していると思われる。

以上の考察は次のようにまとめられる。まず、*tough* 構文の不定詞は、「課題を達成するための行動」、「理解・認識」、「発話」などの意図的な行為を表す他動詞である場合が多い。次に、複合的な他動詞も使えるが、補助動

⁴² 拙稿 (1988b) の *Malo-1* への言及は、Bosque (1999: 250) が、難易、可能性とは意味的に隔たりのある形容詞による *tough* 構文の例として、引用している。

⁴³ この結果は、Bosque (1999: 249), 下田 (2006: 43) の見解とほぼ合致する。なお、下田 (同上) は *fáciles de poder solucionar* や *difíciles de poder superar* のような事例の存在を報告している。

詞の介在は、意味的な条件が整わないかぎり許容されにくい。

4. 6. 2. 受動態の他動詞

資料体のうち、Digno-1 (usted es digna de ser amada) と Imposible-10 (un impulso que parecía imposible de ser frenado) の 2 つは受動態の事例である。第 1 の事例は形容詞が digno であることに注目すべきである。

第 3. 3 項で示した本研究のインフォーマント調査では、受動態の tough 構文の許容度を 14~31 人のイスパニア語母語話者に質問した (Difícil-Ib, IIb, Fácil-I, (Im)posible-IIb, IIIb, (In)digno-Ib, IIb)。得られた許容度は、Difícil-Ib が 67%, Difícil-IIb が 79%, (Im)posible-IIIb が 18%, Imposible-IIIb が 58% であった。⁴⁴ これに対し、(In)digno-IIb は 83%, さらには Digno-1 を基にした調査文(In)digno-Ib (María es digna de ser amada) は 100%, つまり 26 人の被験者全員が可としたのである。即ち、digno の tough 構文は、他の形容詞と比べて遥かに受動態の許容度が高い。

英語の worth は動名詞を従えるなどの点で tough 型の形容詞とは性質が異なるため、その構文は worth 構文と呼んで tough 構文とは区別される。イスパニア語の digno, indigno も、受動態ばかりでなく非対格自動詞を従えることもできる ((In)digno-III, IV, V) ところから、一般の tough 型形容詞とは一線を画すべきであろう。⁴⁵

次に、第 2 の事例は、ウルグアイの作家 Mario Benedetti の小説から得られたものである。先述のようにチリ人の研究者 González (1985)が受動態の tough 構文を可とすることから推して、ラテンアメリカの中でも、特に南米のイスパニア語ではこの形式の許容度が高いのではないかと考えられる。この事例を基にした調査文(Im)posible-IIIb の許容度は 58%に過ぎない。イスパニア人 1 人、メキシコ人 11 人に問い、「自然な文」6 人、「やや不自然な文」2 人、「不自然な文」4 人という結果だった。つまり南米の小説家が書いた文を、半数の被験者は全く自然なイスパニア語とは受け取らなかったわけである。

以上のように、digno を tough 構文をとる形容詞の群から除き、かつ Imposible-10 を地域性の強い事例と見なせば、資料の中に受動態の事例は存在しないという結果になる。第 2 節で、受動態の tough 構文を認めるか否かで研究者の見解が分かれることを紹介したが、本研究の資料およびイン

⁴⁴ (Im)posible-IIb の許容度が特に低いのは、形容詞が posible であることによる。詳細は拙稿 (1995: 11-12) に記した。

⁴⁵ この問題は、拙稿 (1988a: 44-45) でも言及した。

フォーメント調査からは、「受動態の tough 構文は標準的とは言えない」と結論できる。この結論は、Bosque (1999), Real Academia Española et al. (2009) などの見解と合致する。⁴⁶

4. 6. 3. 使役形式の動詞

資料には、不定詞が使役形式になった例が3つある。Cómodo-2 (una cosa cómoda de lamer, de empujar, de hacerla sonar), Difícil-20 (me venía muy difícil de hacer entrar el verso en la música), Fácil-11 (un hombre alterado es más fácil de conducir, de pescarle en contradicciones, de hacerle pronunciar alguna idiotez)であり、第1, 第2はそれぞれ自動詞 sonar, entrar を用いた文, 第3は他動詞 pronunciar を用いた文である。元となる動詞が自動詞であっても、「hacer + 不定詞」という使役形式総体としては他動詞と見なせる。従って、この点では3例とも特異な例とは言えない。

問題は、被使役者を表す人称代名詞の有無に差異が見られることである。第2例は人称代名詞がないが、第1例は直接目的格代名詞 *la* が用いられ、第3例は直接（または間接）目的格代名詞 *le* が用いられている。⁴⁷ 第1例を基にした調査文 Cómodo-I (una cosa cómoda de empujar, de {a. hacer sonar / b. hacerla sonar})では、a. の許容度は46%, b. の許容度は75%であった。即ち、代名詞があるほうが好まれるという結果であった。

第2例に目的格代名詞がないのは、主語 *el verso* が後置されているため、代名詞を付すと *hacerlo entrar el verso* のように後方照応の形になり、理解度が下がることが影響しているかもしれない。文筆の専門家の文章から得た例なので考えにくいだが、或いは *difícil de hacer entrar* の *de* は誤って挿入されたもので、実は tough 構文ではなく不定詞句主語文であるという可能性もある。

⁴⁶ tough 構文を Bosque (1999: 247-259)は「infinitivo pasivo」の構文, Real Academia Española et al. (2009: II, 1980-1985)は「pautas en las que el infinitivo tiene FORMA ACTIVA, pero INTERPRETACIÓN PASIVA」と呼んでいる。即ち、この構文中の不定詞は能動態であることを前提としているわけである。一方、下田 (2006: 43)は、「スペイン語 (の tough 構文/福嶋補) は頻繁に不定詞を受動化できる」とし、次のような事例をあげている。Las ideas avanzadas (...) eran difíciles de ser asimiladas por la población. (コスタリカの雑誌より), (...) éste será un tema muy difícil de ser aprobado por el Congreso (コロンビアの新聞より)。これらの文の成立には、下田が主張するとおり、*por* に導かれる動作主が顕在している点に関与していると思われる。また、これらの例を見る限り、受動態の tough 構文が許されるのは主にラテンアメリカのスペイン語においてではないかと想像される。

⁴⁷ Cómodo-2 と Fácil-11 はウルグアイの作家 Mario Benedetti の小説から得られた例である。Fácil-11 の *pescarle* の *le* は直接目的格として用いられているので、それに続く *hacerle* の *le* も直接目的格かと思われるが、間接目的格である可能性も否定できない。この問題は拙稿 (1994: 43) でも言及し、本稿と一部食い違う主張を行った。本稿の主張を最終案とする。

これらの考察は、以下のようにまとめることができる。まず、tough 構文の不定詞が使役形式をとることは、標準的な用法として認められる。次に、被使役者を表す目的格人称代名詞は、付けるのが一般的であると考えられる。

4. 6. 4. 自動詞

不定詞の部分が自動詞で構成された tough 構文は、資料体の中に 3 例あった。Cómodo-1 (Una urbe de esta extensión no puede ser cómoda de vivir.), Dificil-4 (la lotería del paisaje resultan naipes tan peligrosos como difíciles de jugar), Indigno-1 (considerándose indigno de morir como el Maestro)。第 1 例の不定詞は *vivir* であり、主語はその場所格である。第 2 例の不定詞は *jugar* であり、*jugar a los naipes* の前置詞格目的語がモデル文中の *este libro* の位置をしめている。第 3 例は *morir* であり、不定詞の意味上の主語が *este libro* の位置にある。

このうち、まず第 3 例は、第 4. 6. 2 項で論じた *digno, indigno* 型の形容詞の事例として、tough 構文から除外される。これらの形容詞は受動態の不定詞も、自動詞の不定詞も自在に従えることができる。本研究のインフォーマント調査では、Indigno-1 を基にした文(In)digno-V (San Pedro se consideró indigno de {a. morir / b. ser crucificado} como el Maestro.) に対して、2 人の母語話者はどちらも「a, b ともに自然な文である」と回答した。⁴⁸

残る第 1 例と第 2 例に用いられた動詞は、自動詞であるとは言え、「住む場所」、「遊ぶ対象としてのゲーム」という、必須成分に準じる要素をとる動詞であり、まさにその要素が *este libro* の位置をしめている。従って、「tough 構文の主語は不定詞の意味上の直接目的語である」という規則を少し緩めて、「不定詞の意味的必須成分に準じる要素である場合も稀にある」とすべきかもしれない。⁴⁹

チリ人の研究者 González (1985) は例文 (10e) (Las cicatrices de la viruela son difíciles de desaparecer.) を文法的な文として扱ったが、このように意味的準必須成分を欠く事例は、本研究の資料には含まれていない。また、(10e) を用いたインフォーマント調査 (Dificil-IV) では、28 人の母語話者の許容度は 52% であり、この文を「自然」と判断した 11 人のうち、イスパニア人

⁴⁸ 詳細は拙稿 (1988a: 76-77) に記した。

⁴⁹ Bosque (1999: 25) は、tough 構文の不定詞は他動詞であると主張し、“Todos los intransitivos están excluidos.” と述べた上で、「ただしこのような実例もある」として、拙稿 (1985: 23) を引用し、Cómodo-2 を紹介している。

は 1 人だけで、その他はラテンアメリカの被験者だった。ここには地域差が見られるわけである。ただし *Fácil-II* (*Los niños son fáciles de llorar.*) の許容度は 29% で、ラテンアメリカ人にもほとんど受け入れられない。即ち、ラテンアメリカでは、*desaparecer* のような非対格自動詞はやや許容されるが、*llorar* のような、そうでない自動詞は許容されない、と言える。

本節の観察は、以下のようにまとめられる。第 1 に、*tough* 構文中の不定詞は、原則として他動詞に限られるが、稀に、意味上の準必須成分を持つ自動詞が許される場合もある。第 2 に、上述の成分を持たない自動詞は、イスパニアでは許容されないが、非対格自動詞であれば、ラテンアメリカでは多少許容される傾向にある。

4. 6. 5. 再帰動詞

不定詞が再帰動詞の形式になっているのは、次の 7 例である (*Digno-3* は不定詞が 2 つあるので 2 例と数える)。*Digno-2* (*hacen la vida sabrosa y digna de vivirse*), *Digno-3* (*características peculiares, inolvidables, dignas de preservarse e historiarse*), *Digno-8* (*las considera felices y dignas de repetirse*), *Digno-9* (*este disco es digno de coleccionarse*), *Digno-10* (*[el lugar] es digno de admirarse*), *Fácil-1* (*mis relaciones con María Luisa, las que consideraba peligrosas y fáciles de convertirse en un escándalo*)。

このうち第 1~6 例は *digno* が用いられた事例であり、第 4. 6. 2 項、4. 6. 4 項で述べたとおり、*tough* 構文から除外されるべきである。インフォーマント調査では *Digno-9* を基にした (*In*)*digno-II* (*Este disco es digno de coleccionarse.*) という文について 12 人の母語話者の判断を尋ねたところ、83% という高い許容度だった。⁵⁰ *digno*, *indigno* は、一般の *tough* 構文とは異なり、自動詞、受動態、再帰動詞を従えることができることが確認できる。

digno の事例を除くと、不定詞が再帰動詞の形式になった事例は *Fácil-1* のみとなる。これはイスパニアの詩人 *Rafael Alberti* の書いた文章から得られた例で、「スキャンダルになりかねない危険な関係」という意味を表している。用いられた再帰動詞 *convertirse* は「~になる」という自動詞的働きをしており、本研究の資料には類例が見当たらない。しかし、下田 (2006: 43) は電子コーパスで得た事例として、*fácil de convertirse en hábito* と *previsiones (...) difíciles de traerse* を挙げているので、*Fácil-1* は一応、市

⁵⁰ (*In*)*digno-I* (*María es digna de amarse.*) は 18% という低い許容度だったが、これは主語が人間を表す語で、再帰受動文として成り立たないことに起因する。次の段落で示す *Fácil-I* が許容度 16% という低さで、他の文から際立っているのも同じ理由による。

民権を得た表現だと考えられる。

本研究のインフォーマント調査では、Difícil-I (Este libro es difícil de entenderse.), Difícil-II (Esta teoría es difícil de explicarse.), Fácil-I (Juan es fácil de engañarse.), (Im)posible-III (un impulso que parecía imposible de frenarse) という文を用いて実施し、許容度は順に 40%, 40%, 16%, 54%と低かった。従って、tough 構文では、基本的には再帰動詞は生起しにくいものの、時に認められる場合がある、と結論せざるを得ない。

4. 6. 6. まとめ

イスパニア語の tough 構文の不定詞については、次のことが明らかになった。第 1 に、「課題を達成するための行動」、「理解・認識」、「発話」などの意図的な行為を表す他動詞である場合が多い。複合的な他動詞も使えるが、補助動詞の介在は、意味的な条件が整わないかぎり許容されにくい。第 2 に、受動態の tough 構文は標準的とは言えない。ラテンアメリカでは多少許容度が高くなる。第 3 に、不定詞が使役形式をとることは、標準的な用法として認められ、かつ、被使役者を表す目的格人称代名詞は、付けるのが一般的である。第 4 に、不定詞は、原則として他動詞に限られるが、稀に、意味上の準必須成分を持つ自動詞が許される場合もある。上述の成分を持たない自動詞は、イスパニアでは許容されないが、非対格自動詞であれば、ラテンアメリカでは多少許容される傾向にある。第 5 に、再帰動詞は生起しにくいですが、時に許される場合がある。

即ち、tough 構文の不定詞になり得る動詞は、典型的には意図的な行為を表す他動詞であり、自動詞、受動態、再帰動詞は難しい場合が多いが、それぞれ全く不可能ではない、という事実が確認できた。

4. 7. 文末・文全般 (φ)

この項ではモデル文 Para mí este libro es fácil de leer φ. の「φ」の部分、つまり不定詞に後続する要素を扱い、併せて文の全般の特徴（平叙文か疑問文か、S V 語順か V S 語順か、他の形容詞と等位または並列構造にあるか）も取り上げる。

4. 7. 1. 後続語の有無

まず、不定詞に後続する語の有無については、以下のとおりである。資料は 150 例だが、1 つの文中に不定詞が等位形式や並列形式で複数個現れる事例があるので、第 4. 6 項と同様、この項の対象となる形式の総数は 160

となる。

(33) a. 後続語なし (149 例)

b. 再帰代名詞あり (7 例)

c. 目的格人称代名詞あり (4 例。うち、直接目的格 2 例:Fácil-4, Fácil-11。

使役動詞 *hacer* の被使役者を表す目的格 1 例 : Cómodo-2, Fácil-11)

このように、事例の大半には後続語がないが、わずかながら代名詞を後接する例が存在する。(33b)は、第 4. 6. 5 項で見たとおり、6 つが *digno* の事例であり、*tough* 構文と言えるのは、Fácil-1 (*mis relaciones con María Luisa, las que consideraba peligrosas y fáciles de convertirse en un escándalo*) という自動詞化用法の 1 例だけである。これについては既に論じた。

(33c) の 4 例のうち、使役形式のもの 2 つについては第 4. 6. 3 項で扱った。残る 2 例は、Fácil-4 (*esas cosas no se piensan, que si se piensan son más fáciles de gafarlas*) と Fácil-11 (*un hombre alterado es más fácil de conducir, de pescarle en contradicciones, de hacerle pronunciar alguna idiotez*) の *de pescarle en contradicciones* の部分である。

Fácil-4 は、ノーベル賞作家 Camilo José Cela の文章から得られた。「闘牛士は、牛の角で突かれはしないかとは、あまり考えない。考えすぎると、むしろ角にひっかけられることが多いからである」といった趣旨の文である。主語 *las cosas* と同一指示の直接目的格人称代名詞 *las* が不定詞 *gafar* に後接している。*tough* 構文としては特異な事例である。文体的な理由が関与しているのかもしれない。

Fácil-11 は、既に出たウルグアイの作家 Mario Benedetti の文である。「平常心を失っている人は操りやすいし、発言の矛盾を指摘するのも容易だし、失言を導くこともできる」という内容である。主語 *un hombre alterado* と同一指示の直接目的格人称代名詞 *le* が不定詞 *pescar* に後接している。この事例では、*conducir*, *pescar*, *hacer pronunciar* と 3 つの不定詞が並列されており、第 1 の不定詞には後続する語がなく、第 2, 第 3 の不定詞には目的格代名詞および前置詞句が伴って、順次複雑な構造になっている。代名詞を付加しない第 1 の不定詞と、使役形式のため代名詞の生起が要求される第 3 の不定詞の中間に位置する *pescar* には、代名詞を付加することが文のバランスから見て好ましいと、作者が判断したのではないかと推測される。

本研究では、このような人称代名詞後接の可否について、以下のインフォーマント調査を行った。各々、許容度を添えて再録する。Difícil-I (*Este libro*

es difícil de entenderlo.) (58%), Difícil-II (Esta teoría es difícil de explicarla.) (48%), Fácil-I (Juan es fácil de engañarle.) (13%)。いずれも許容度は低く、特に人間を主語にした Fácil-I について、31 人の被験者中、「自然だ」と回答したのはイスパニア人、アルゼンチン人、各 1 人だけだった。この許容度の低さは、Difícil-III (Esta teoría es difícil de explicar sin {a. conocer / b. conocerla}.) (a. 16%, b. 97%) における目的格代名詞の必要性と比べると、いっそう際立つ。Difícil-III では、sin に導かれる前置詞句は tough 構文から独立しているので、conocer のあとに la の付加が要求されるのである。⁵¹

以上の考察は次のようにまとめられる。tough 構文では、不定詞のあとに、主語と同一指示の目的格代名詞を付加することは一般的ではない。ごく稀におそらく文体的理由により、それが許される場合がある。

4. 7. 2. 文の種類

資料のうち、平叙文と疑問文の個数、肯定文、否定文の個数は以下のとおりである。

(34) a. 平叙文 (146 例)

- b. 疑問文 (4 例。Agradable-2: ¿Verdad que a simple vista ésta es más agradable de leer?, Difícil-24: ¿es tan difícil de comprender acaso?, Imposible-5: ¿qué me va usted a decir que yo no haya sufrido de mí con la fuerza ésta, que parece imposible de suavizar y calmar?, Posible-1: ¿No hay casos en los que la anestesia no es posible de utilizar?)

c. 肯定文 (137 例)

d. 否定文 (13 例)

大半が平叙文であり、疑問文がわずかに見られただけで、感嘆文はなかった。また、命令文もなかった。**Sé más fácil de entender.* (君はもっと人から理解されるようにしなさい。) のような表現は、日本語主体で考えれば可能であっても良さそうだが、実際には用いられない。即ち、tough 構文は話者が聞き手にむかって、ある対象の叙述を行ない、あるいはその情報を求めることに専ら用いられる表現形式であると言える。

なお、肯定文、否定文の問題については、4. 3. 2. C 項および 4. 4. 1. B 項で詳述した。

⁵¹ 詳細は拙稿 (1988a: 73-77) に記した。

4. 7. 3. 語順など

資料 150 例の語順は次のとおりである。(35a-d) は文の中での語順, (35e) は現在分詞句の中での語順, (35f-h) は名詞句内の語順を示す。

- (35) a. 「主語 + 動詞 + 形容詞句」の語順の文 (55 例〔うち 2 例は digno〕)
 b. 「動詞 + 形容詞句 + 主語」の語順の文 (4 例。例: Dificil-11: era difícil de entender la tía Clara)
 c. 「動詞 + 形容詞句」の語順の文 (25 例。主語を欠く文。例: Largo-2: es largo de explicar)
 d. 「目的語 + 動詞 + 形容詞句」の語順の文 (3 例〔うち 1 例は digno〕。Dificil-18: las había difíciles de encontrar, Digno-8: las considera felices y dignas de repetirse, Fácil-5: me creía fácil de modelar)
 e. 「動詞 + 目的語 + 形容詞句」の語順の現在分詞句 (1 例, ただし indigno。Indigno-1: considerándose indigno de morir como el Maestro)
 f. 「名詞 + 形容詞句」の語順の名詞句 (55 例。例: Dificil-33: una duradera impresión de extrañeza difícil de precisar)
 g. 「形容詞句 + 名詞」の語順の名詞句 (1 例。Fácil-14: el cráneo vidrio, también todo el cuerpo de vidrio, fácil de romper un muñeco de vidrio)
 h. 「先行詞 + 関係節中に『動詞 + 形容詞句』」の語順の名詞句 (6 例。例: Imposible-5: ¿qué me va usted a decir que yo no haya sufrido de mí con la fuerza ésta, que parece imposible de suavizar y calmar?)

(35a-d) で明らかのように, 主語が動詞に先行する事例が多い。また名詞句を形成する場合は, 標準的な「名詞 + 形容詞句」の語順がほとんどである。アルゼンチンの作家 Manuel Puig の作品から得られた Fácil-14 (fácil de romper un muñeco de vidrio) は, その逆の語順の唯一の事例である。英語では, an easy to take laxative, a tough to please boss, an easy to sew pattern のように「tough 形容詞 + to 不定詞」が 1 つの構成素として名詞に前置されてこれを修飾することができる。⁵² Fácil-14 は, 形容詞句と名詞の順序に限って言えば, 英語のこの用法と共通しているが, 形容詞句が冠詞に先行している

⁵² Nanni (1978: 9)。Nanni (1978)は, 英語の一定の条件下における「tough 形容詞 + to 不定詞」を複合形容詞と見なすことを提案した。スペイン語の「tough 形容詞 + de + 不定詞」も, 単一の形容詞と容易に等位・並列構造を作ることや, 他の要素によって分断されない(拙稿 1988a: 80) ことなどから, 複合形容詞と見なしていいのではないかと思われる。

点が異なっており、極めて特異な事例だということができる。⁵³

なお、tough 構文の形容詞句が他の形容詞と等位構造または並列構造を成す事例が 22 例あった (うち 4 例は digno)。Difícil-47 (herramienta tan necesaria como difícil de encontrar), Fácil-44 (Su tejido es suave, a la vez resistente y fácil de limpiar.) がその例である。この型の事例が無視できない個数あるのは、tough 構文の「形容詞 + de + 不定詞」という語連鎖が、単一の形容詞に相当する 1 つの構成素を成していることを示唆している。

4. 7. 4. まとめ

この節の考察で得られた結果は、次のとおりである。第 1 に、tough 構文では、不定詞のあとに、主語と同一指示の目的格代名詞を付加することは一般的ではない。ごく稀におそらく文体的理由により、それが許される場合がある。第 2 に、tough 構文は平叙文として用いられることが多い。第 3 に、「主語 + 動詞 + 形容詞」の語順が一般的である。第 4 に、「形容詞 + de + 不定詞」という語連鎖は、1 つの構成素を成しているのではないと思われる。

5. 結論

以上でモデル文 Para mí este libro es fácil de leer φ. の各部の考察が完了した。それぞれの結論を今いちどまとめてみよう。

5. 1. 動作主句 (PARA MÍ)

① 不定詞の表す行為の動作主が誰であるかをとりたてて明示しないのが通例である。tough 構文では、動作とその対象との関係を述べることに主眼が置かれていると言える。

② もし言及の必要があるときは、間接目的格代名詞や para に導かれる前置詞句で表現が可能だが、それによって「形容詞 + de + 不定詞」という連鎖を分断することはできない。⁵⁴

③ 動作主は人間、動物、機械など [+ 動的 (dynamic)] という素性を持ち、典型的には「一般の人」を指す。

⁵³ Fácil-14 は、規範から逸脱しているとして、資料から除くという考え方もあろうが、イスパニア語圏を代表する現代作家が生み出した事例なので、記録しておく価値があると判断し、資料に加えた。

⁵⁴ 本研究の資料では、間接目的格代名詞などにより動作主を明示する例が 150 例中 4 つあったが、下田 (2006: 43-44) が用いた資料では得られなかったという。

5. 2. 主語 (ESTE LIBRO)

① 主語は特定の対象物を指す定名詞句であることが多い。不定冠詞を伴う場合や、無冠詞の場合も、単純に不特定の対象物を指すことはない。tough 構文とは、もっぱら与えられたある主題について、その属性を叙述する文であって、新情報を主語として現象を述べる文ではない。

② 主語になれるのは、原則として不定詞の意味上の直接目的語のうち典型的なものに限られる。繰り上げ構文の目的語、慣用句の一部である直接目的語、2 種類の直接目的語をとり得る他動詞の直接目的語などは、tough 構文を構成しにくい。この制約は、英語の tough 構文の主語の持つ制約よりかなり厳しい。

③ 主語は無生である場合が多く、有生の事例は少ない。⁵⁵ これは、無生の名詞の属性は、それが他者からどのように働きかけられるかという叙述が容易であることと関係があると考えられる。

④ digno, indigno を用いた場合は、主語との対応が可能であり、かつ有生名詞を主語にとることも多い。一般の tough 構文とは区別すべきである。5. 5 項の⑤を参照。

5. 3. つなぎ動詞 (ES)

① つなぎ動詞にはもっぱら ser が用いられ、estar の使用例はない。tough 構文の役割は、恒常的な属性を表すことであることの証左の 1 つと言える。

② 動詞は現在形が群を抜いて多く用いられ、それに不完了過去(線過去)が続く。単純過去(点過去)、現在完了の例は見られない。tough 構文が汎時間的・普遍的な事柄を表すのに適した形式であることの証左の 1 つと言える。

5. 4. 形容詞 (FÁCIL)

① tough 構文の形容詞は「難易」、「快・不快」、「適・不適」といった「好悪」を示す。対象そのものの属性ではなく、それを利用しようという目的を持つ者から見た属性を示す。

② imposible は tough 構文を作るが、posible は原則として、それができない。ただし、否定形式で imposible に相当する意味を表す場合はその限りで

⁵⁵ 下田 (2006: 45) も、「Tough 構文における (主語) 名詞句は事物が大部分を占める」として、同様の主張を行なっている。

はない。またラテンアメリカでは possible を許容する傾向がイスパニアより強い。

③ 形容詞を欠く ϕ -1~15 のような文 (「無形容詞 tough 構文」) は、意味的観点から tough 構文の一種と見ることができる。

5. 5. 前置詞 (DE)

① tough 構文がとる前置詞は de に限られる。

② 疑似 tough 構文 (「形容詞・副詞 + para + 不定詞」という語連鎖から成る文) には para が用いられる。しかし疑似 tough 構文は、以下の理由により、tough 構文の一種とは考えられない。第 1 に、疑似 tough 構文は「ある行為の実行を阻止する属性が存在すること」などを示すものであり、tough 構文とは表現動機が異なっている。第 2 に、疑似 tough 構文の成立には demasiado, aún のような程度副詞が関わっている。この点でも tough 構文とは異なっている。第 3 に、疑似 tough 構文では、形容詞・副詞の意味上の主語と同一指示の直接目的格代名詞が不定詞に後接するケースが多い。また、不定詞が自動詞である例も少なからずある。

5. 6. 不定詞 (LEER)

① tough 構文の不定詞になり得る動詞は、典型的には意図的な行為を表す他動詞であり、自動詞、受動態、再帰動詞は難しいケースが多いが、それぞれ全く不可能ではない。

② 不定詞は、「課題を達成するための行動」、「理解・認識」、「発話」などの意図的な行為を表す他動詞であるケースが多い。複合的な他動詞も使えるが、補助動詞の介在は、意味的な条件が整わないかぎり許容されにくい。

③ 不定詞が使役形式をとることは、標準的な用法として認められ、かつ、被使役者を表す目的格人称代名詞は、付けるのが一般的である。

④ 意味上の準必須成分を持つ自動詞が許される場合もある。また、ラテンアメリカでは、受動態や非対格自動詞の使用が多少許容される傾向にある。

⑤ digno, indigno は自動詞、受動態、再帰動詞の不定詞を自由に従えることができる点で特異であり、tough 形容詞とは区別されるべきである。5. 2 項の④を参照。

5. 7. 文末・文全般 (φ)

① 不定詞のあとに、主語と同一指示の目的格代名詞を付加することは一般的ではない。ごく稀におそらく文体的理由により、それが許される場合がある。

② *tough* 構文は平叙文として用いられることが多い。

③ 「主語 + 動詞 + 形容詞」、つまり主語を動詞に先行させる語順が一般的である。主語が一般に定名詞句であることと関連していると思われる。

④ 「形容詞 + *de* + 不定詞」という語連鎖は、1つの構成素を成しているのではないと思われる。

5. 8. むすび

以上の各部の特徴の総体から得られるイスパニア語の *tough* 構文の特徴は、次のようにまとめることができる。

- (36) a. 意味機能：ある対象が、主題として与えられる。*tough* 構文は、この対象が、特定の個人ではない、任意の人が行う意図的な行為を受けたときに、どのような恒常的・汎時間的属性を示すかを叙述する。この属性は、対象の利用者の観点から見た「好悪」のいずれかに帰する属性である。
- b. 他の構文との関連：主語は、不定詞の意味上の直接目的語であるのが通例である。この点は、受動文の主語の条件と並行している。動作主を明示しないのが通例である。この点は、再帰受動文の制約と並行している。
- c. 地域差：受動態、自動詞、再帰動詞、*posible* の使用には地域差があり、イスパニアでは許容度が低く、ラテンアメリカでは多少許容される傾向にある。

(36a) に従えば、*Este libro es fácil de leer.* という *tough* 構文は、次のような意味を表す。⁵⁶ 「まず『この本』という対象が主題として与えられる。これに対して、任意の人が『読む』という意図的行為をする際、『この本』は恒常的・汎時間的に『容易に読める』という属性を示す。これは『好悪』の『好』、つまり『この本』を利用しようとする者にとって有益な属性であ

⁵⁶ これまでの議論により、動作主 (*para mí*) を示す部分は *tough* 構文の必須要素ではないことが確認されたので、このモデル文では省かれている。

る」。ある本の属性としては、分厚い、大きい、高価である、新しい、汚れている、など、本そのものの属性を列挙することも可能である。その中であって *fácil de leer* という属性は、読者にとってのその本の利便性、いわば道具の使い勝手に類する事柄である。これを叙述することこそが tough 構文の機能であると言える。

(36b) は、イスパニア語の *accessibility hierarchy* や態の問題を考える際の手がかりになると思われる指摘である。

(36c) により、第 2. 3 項で提出した問題提起の大半への答えが出せたと考える。⁵⁷

第 5. 1 項～5. 7 項にまとめた tough 構文の各部の記述、および (36) に記した全体の記述をもって、本研究の結論とする。

英語研究では tough 構文については次のような問題が論点となることがある。⁵⁸ 第 1 に、tough 構文は *it... to* 構文とどのような関係にあるのか。第 2 に、不定詞の後ろに本来の目的語が生じないのはなぜか。第 3 に、tough 構文の動作主「*for ...*」は主文の要素なのか。第 4 に、tough 構文の不定詞句は節なのか動詞句なのか。本研究では、イスパニア語の tough 構文の表層上の記述を行うにとどめ、これらの問題の大半には立ち入らなかった。ただ、第 3 の問題については、主文の要素ではない、という見解を提示した。

後記

本研究「イスパニア語の tough 構文について」は、もっと早くに完結すべきであったが、諸事情により今日に至った。その間に電子コーパスの発達によって、この研究に着手した頃とは比較にならない分量のデータが容易に得られるようになった。例えば本研究では 2 例しか得られなかった *cómodo* の用例は、Real Academia Española の電子コーパス *Corpus Referencial del Español Actual* を使えば、たちまち 30 例が得られる。本研究で 53 例得られた *difícil* は 600 を超える例が利用でき、中には次のような、不定詞の後に直接目的語を従える、興味深い例も見られる (イタリックは福嶋。2016 年 3 月 28 日検索)。

⁵⁷ 拙稿 (1986a: 83) に記した。なお、その中にあげた tough 構文の習得の問題については、調査が及ばなかった。

⁵⁸ 金子 (2001) を参照。

“Hay cooperación que viene de forma multilateral, de la Unión Europea, que viene bilateral y otras de organizaciones no gubernamentales y todo viene de planes bianuales y trianuales o quinquenios, de manera que esta ayuda es *difícil de englobarla*”, dijo la autoridad. (*Los Tiempos*, 28 de enero de 1997, Cochabamba, Bolivia)

従って今日的意義の乏しい研究を発表することに問題があることは承知しているが、未完のまま放置するのも好ましくないので、とにかく完結させることにした。

前稿 (1995) (「下の 2」) 発表以降に、本研究を引用した研究が発表された。その 1 つは、Bosque et al. (eds.) (1999) *Gramática descriptiva de la lengua española* 第 4 章 (Bosque 執筆) であり、拙稿 (1985), 同 (1988b) に掲げた例文が引用されている (Bosque 1999: 248, 250)。もう 1 つは下田 (2006) 「スペイン語の TOUGH 構文について —機能論的分析—」であり、本研究より広い範囲の事例を、電子コーパスを利用して収集し、tough 構文の特徴を追究している。この 2 つの研究については、可能な限り本稿で引用した。

参考文献 (本稿で引用したものに限る)

- Bosque, Ignacio. 1999. Capítulo 4. El sintagma adjetival. Modificadores y complementos del adjetivo. Adjetivo y participio. En *Gramática descriptiva de la lengua española* (Bosque, Ignacio & V. Demonte, eds.). I, 217-310. Madrid: Espasa.
- González, Nora. 1985. Object to subject raising in Spanish. *Linguistic Notes from La Jolla* 13. San Diego: University of California.
- 金子義明. 2001. tough 構文. 中島平三, 編. 『[最新]英語構文事典』. 35-51. 東京: 大修館書店.
- Nanni, Deborah. 1978. The *easy* class of adjectives in English. 博士論文. Amherst: University of Massachusetts.
- Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española. 2009. *Nueva gramática de la lengua española*. Madrid: Espasa Libros.
- 下田幸男. 2006. スペイン語の TOUGH 構文について —機能論的分析—. *Hispanica* 50, 33-54. 東京: 日本イスパニヤ学会.
- 拙稿 (福寫教隆). 1985. La construcción *tough* en español -1-. *Lingüística Hispánica* 8, 13-42, Osaka: Círculo de Lingüística Hispánica de Kansai.

- _____. 1986a. イスパニア語の tough 構文について (上). 『神戸外大論叢』 36 (6), 75-103. 神戸: 神戸市外国語大学。
- _____. 1986b. ロマンズ語の tough 構文について —イスパニア語を中心に—. 『ロマンス語研究』 19, 61-70. 東京: 日本ロマンス語学会。
- _____. 1988a. イスパニア語の tough 構文について (中). 『神戸外大論叢』 39 (4), 61-84. 神戸: 神戸市外国語大学。
- _____. 1988b. La construcción *tough* en español -2-. *Lingüística Hispánica* 11, 37-59, Osaka: Círculo de Lingüística Hispánica de Kansai.
- _____. 1994. イスパニア語の tough 構文について (下の1). 『神戸外大論叢』 45 (5), 37-48. 神戸: 神戸市外国語大学。
- _____. 1995. イスパニア語の tough 構文について (下の2). 『神戸外大論叢』 46 (4), 1-14. 神戸: 神戸市外国語大学。

www.rae.es Real Academia Española 電子コーパス CREA (Corpus Referencial del Español Actual) (最終閲覧 2016 年 3 月 28 日)

附記

『神戸外大論叢』 46(4) (1995) 所収の拙稿「イスパニア語の tough 構文について (下の2)」に次の誤りがありました。お詫びして訂正します。

p.7, 6~7 行目「現在形と線過去は完了相に属し, 点過去と現在完了は不完了相に属する」→「現在形と線過去は不完了相に属し, 点過去と現在完了は完了相に属する」

p.9, 下から4行目「4.3.1. 意味的特徴」 → 「4.4.1. 意味的特徴」

Keyword(s): イスパニア語、スペイン語、tough構文、形容詞、不定詞